

平成22年度 夏季展

# 九谷文庫展



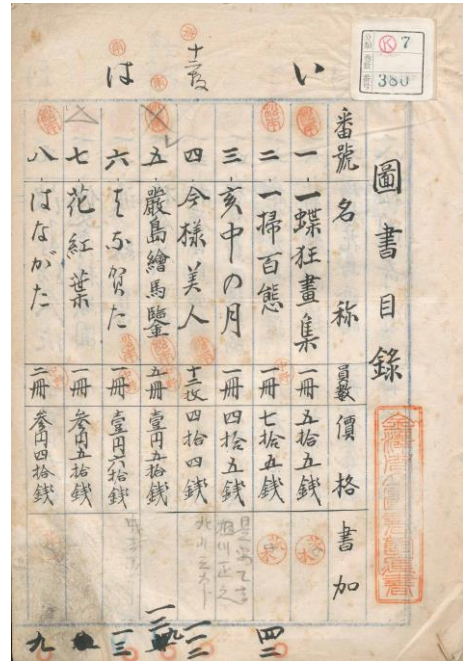
日時 平成22年7月13日(火)～9月12日(日)  
場所 金沢市立玉川図書館 近世史料館

## 九谷文庫

九谷文庫は昭和 29 年に金沢九谷焼工業協同組合から金沢市立図書館に寄贈されたものである。

明治期の美術関係書を中心とした江戸期、大正期を含む絵手本類等 216 件 (555 点) からなり、これらの中には、喜多川歌麿、安藤広重の画本、狩野常信、尾形光琳、河鍋暁斎、谷文晁など江戸期の絵師の手本をはじめ、明治・大正期の画家の複製本が含まれている。

これらの資料は、上絵の手本、デザインの見本として組合員の画工達に広く貸し出され、絵付けの参考とされた。



「加賀九谷陶磁器同業組合図書目録」(K7-380)

## 金沢九谷焼工業協同組合

金沢九谷焼工業協同組合は昭和 22 年に設立されたが、その歴史は、明治 15 年に組織された金沢九谷焼陶画工同盟会に遡る。明治 19 年組合法の施行により金沢九谷焼陶画工組合と改称され、その後明治 33 年、重要物産同業組合法の制定に伴い、窯元、商人も加入した加賀（金沢）九谷陶磁器同業組合に、改組・改称したが、太平洋戦争中の混乱で自然消滅したかたちとなる。

昭和 22 年 2 月、大樋焼を含めた窯元、商人、画工が参加し、「金沢九谷焼工業協同組合」が組織された。初代理事長を利岡光仙が勤め、事業として昭和 36 年に「金沢九谷陶宗木米窯跡碑」を建設した。

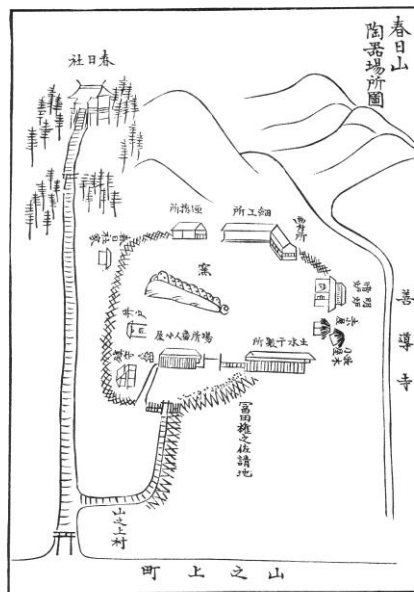


『加賀九谷陶磁器同業組合創立五十周年記念 金沢の焼物』(上:表紙 下:祝宴)



## 金沢九谷の黎明

金沢に於ける九谷焼の起原は、文化4年(1807)、青木木米が春日山の麓に開窯したことに遡る。(春日山窯)翌5年木米が帰京し、民窯となり、松田平四郎らが受け継ぐが、衰微し、文政初年閉窯となる。文政5年(1822)武田秀平(民山)が春日山窯を再興し、里見町の自邸に錦窯(上絵用の窯)を築く。従来の九谷焼と趣を異にし、白磁に赤絵金彩で繊細な上絵付けをする、赤絵九谷を創始し、後の八郎手の先駆となった。



「春日山陶器場所図」(『稿本金沢市史工芸編』)

## 金沢九谷の近代化

多くの武士が居住した金沢では、士族救済と殖産興業のため、明治5年(1872)金沢区方が区方開拓所を設置し製陶部その他をおき、士族の失業救済授産事業を開始した。

明治政府は、国力増強の手段として殖産興業、輸出振興策を打ち出し、その具体的な手段として万博への参加や内国博覧の開催など政府自らの手で行い、これらが工芸の発展に大きく寄与した。

こうした機会を捉え、九谷焼は輸出貿易に力を入れ、欠かさず出品参加し世界にその名を知られるようになった。

金沢の九谷焼の近代化は授産事業から始まるが、貿易振興の輸出品として生産されたため、赤絵・金銀彩、花鳥・山水、「石目打」(細かい点を並べた技法)などの凝った技工による華麗な上絵が施され、明治の後半には盛金技法が加わり、より豪華となった。また、テレメン油により上絵具の濃淡を自由に表現する技法が開発され、一層精緻な上絵が可能となり、「細字書」も行われるようになった。大正になり、青粒・白粒・金粒、花詰などの絵付け、草書体の「細字書」が始まり、今に伝わる絢爛たる金沢九谷を生み出した。



「色絵金彩花鳥図ソーサー」  
(銘 藤岡岩花堂)



「盛金絵付青粒割取花鳥人物図小皿」  
(銘 藤岡岩花堂)

## 阿部碧海とその時代

阿部碧海(阿部甚十郎敬忠)(1842~1910)は、旧加賀藩士で馬廻役、所口町奉行などを務め、1,500石の禄を受ける大身であった。

明治2年(1869)、士族授産・殖産興業・九谷復興のために立ち上がり、古寺町(現片町2丁目)の自邸に5基の錦窯(上絵用窯)を築造する。内海吉造を職長とし、岩波玉山、任田旭山、小寺椿山など民山窯の陶画工を招き、工人を雇入れ、80余名態勢で製陶を開始した。

円中孫平らの協力を得、神戸・長崎に支店を設け海外輸出品の製造を始め、ウィーン万博において名声を博し、販路の拡張に成功した。

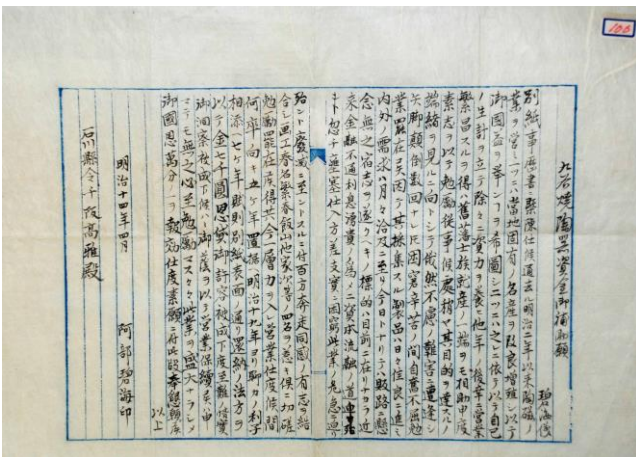
阿部窯の製品は実用品であったが、碧海の目の高さとな工の指導により、質の高い製品が生産され、「金沢九谷」が九谷の優品の代名詞となる基礎を築いた。しかし、商法に不慣れなためトラブルに巻き込まれ、明治13年工場を閉じた。

その後、小さな陶器店を営み陶業界の発展に奔走するが、晩年は不遇で、明治43年、69歳で波乱の人生を終えた。



「阿部碧海写真」

(阿部碧海資料、金沢美術工芸大学所蔵)



「九谷焼陶器資金御補助願」(阿部碧海資料、金沢美術工芸大学所蔵)



「功劳賞授与証」(阿部碧海資料、金沢美術工芸大学所蔵)



「明治14年 有功二等賞」  
(阿部碧海資料、金沢美術工芸大学所蔵)



「明治14年 東京内国勸業博覧会有功メダル」  
(阿部碧海資料、金沢美術工芸大学所蔵)





九谷文庫の上絵資料と金沢九谷



「夜討曾我」(『工業図式 3』、721.08-43 ③)



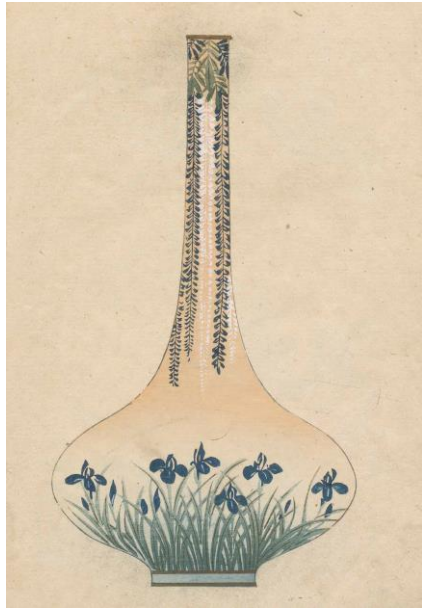
「色絵金彩夜討曾我図徳利」(銘 九谷)



『中古名家聚美画譜 1』(721.08-9 ①)



「金襴手割取人物山水図手桶型花生」  
(銘 加賀九谷鑄木製之)



『美術海 15』(727.9-50 ②)



「金卷亀甲藤花文筒形花生」  
(銘 九谷雪花)



『千代見草 3』(721.08-3 ③)



「盛金絵付百人一首図蓋付湯呑」  
(銘 九谷鏝木、細字 清山[小田])



## 九谷焼の技法・画風

名 称	説 明
木 米 風	1807(文化4)年、青木木米が指導した春日山窯で始まった五彩人物画の図柄
赤 描 き 手	1822(文政5)年開窯の民山窯で武田民山が始めた赤描きの上に摺金で線描きを加える技法
八 郎 手	1835(天保6)年開窯の宮本窯で飯田屋八郎右衛門が完成させた赤描きの技法
二 度 焼	1851(嘉永4)年、佐野の斉田伊三郎が始めた技法で赤描きの上に黒または茶を施し焼成し、その上に金描きし、再度焼成する方法
金 襷 手	1865(慶応元)年、全面を赤で下塗りしその上に金のみで彩色する技法
庄 三 手	1865(慶応元)年、寺井の九谷庄三が確立した[彩色割取金襷手]という華やかな画風で、緑・黄・紺・青・紫・淡緑とその中間色を出すことにより可能となった
分 業	1867(慶応3)年頃から「素地作り」と「上絵付け」の分業が広く行われるようになった
磯 右 衛 門 風	1867(慶応3)年頃から、縁模様で幾何学的模様を配し、見込みに黄緑色主体の山水を描く画風が始まった
十六羅漢・三十六歌仙	1874(明治7)年頃、赤・金・黒を主とした「十六羅漢」「三十六歌仙」などの人物画が始まる
百 老 手	1877(明治10)年頃流行した、赤絵細描に金銀彩を加え人物を多く描き込む画風
石 目 打	1877(明治10)年頃流行した、花鳥・山水画の空白を細かい点(石目)で埋める画風
石 膏 型 の 法	1877(明治10)年、松田与八郎が石川県勸業試験場で石膏型による素地形成法を教え始めた
武 者 絵・芸 者 絵	1877(明治10)年頃から、輸出九谷に武者・芸者・富士山・桜などが盛んに描かれるようになった
舶 来 顔 料	1880(明治13)年頃から舶来顔料が多種輸入され、上絵の彩色がより絢爛、美麗になった
瑪瑙による研ぎ出し	1880(明治13)年、松本佐平が始めた瑪瑙で金彩を研ぎ出す技法
盛 金 絵	1882(明治15)年、清水美山が始めた技法で、生地の上に絵具を塗り重ね、焼き重ねながら、ひとつひとつ模様を型取りその上に本金を塗り重ねる技法で、高い技術と手間暇が必要である
細 字	1882(明治15)年、野村善吉、宮庄一藤、高橋北山らが九谷焼に細字を描き始める
テレメン油の使用	1884(明治17)年頃から、テレメン油を使い上絵に濃淡をつける技法が始まる
四分一金による絵付	1885(明治18)年から清水美山、松岡初二と金合金による上絵を始め、金沢九谷の特徴となる
白 盛 釉	1893(明治26)年、友田組が立体的に上絵ができる白盛釉を完成する
松 雲 堂 風	1893(明治26)年頃、松本佐平が始めた織物・染物・草模様などを取り入れた新意匠
西 洋 絵 付 風	1897(明治30)年頃から洋油彩や水金を用い、テレメン油で鮮やかなぼかしを入れた西洋絵付風が普及し出す
写 真 絵 付	1902(明治35)年林屋次三郎が始めた、磁器面に写真を転写する技法
牡丹に孔雀の図柄	1907(明治40)年頃、清水美山が「孔雀に牡丹を配した図柄」を考案し、大流行した
新 顔 料 の 開 発	1908(明治41)年までに、石野龍山は黄釉、青紺釉、茶褐色釉、赤色釉などを開発
青粒・白粒・金粒	1912(大正元)年頃から、青色、白色、金色の細かい点を地色の上に密集して施し、地色の上を彩る技法が広まる
草 行 体 の 細 字	1912(大正元)年、小田清山は既存の細字技法に工夫を重ね、草書体の細字を始めた
花	全面に描かれた花の紋様に金彩が施された華麗な上絵で、大正2(1913)年頃清水美山によって始められた

「九谷焼の沿革」「九谷焼330年」より



「盛金青粒葡萄図酒器」(銘 有 声)



「色絵金彩波に兎図小皿」(銘 大日本九谷製)



「色絵金彩花詰徳利一对」(銘 九谷栄山)



「盛金絵付七福神図輪茶碗」(銘 九谷、細字 清山[小田])

## 展示史料一覧

No.	史料名	番号	年代	備考
1	春日山陶器場之図	16. 95-34		
2	金府大絵図	大1005	弘化・嘉永期	
3	金沢市街図(職業別明細図第604号石川県)	21. 2-197	昭和14年	西村善汎著 東京交通社刊
4	金沢町絵図(十間町)	090-1034⑬	文化8年	金沢町会所
5	先祖由緒井一類附帳(阿部甚十郎)	16. 31-65-315	明治3年	
6	先祖由緒井一類附帳(諏訪茂)	16. 31-65-5009	明治3年	
7	先祖由緒井一類附帳(友田安清)	16. 31-65-7207	明治4年	
8	先祖由緒井一類附帳(春名繁春)	16. 31-65-9049	明治4年	
9	金沢の焼物	K751-101イ	昭和12年	加賀九谷陶磁器同業組合
10	加賀九谷陶磁器同業組合図書目録	K7-380	明治44年	加賀九谷陶磁器同業組合
11	潜龍堂画譜 3	721-16③	明治12~14年	芸艸堂
12	千代見草 3	721. 08-3③	明治34年	山田芸艸堂
13	中古名家聚美画譜 1	721. 08-9①		嵩山堂
14	梅嶺菊百種(地)	721. 08-11	明治29年	大倉孫兵衛
15	絵本手鑑	721. 08-15	享保5年	文熙堂
16	宝船集 1	721. 08-21①	大正7~11年	伊勢辰商店
17	景年花鳥画譜(春之部、夏之部)	721. 08-29①、②	明治25年	山田芸艸堂
18	工業図式 3	721. 08-43③	明治16年	大倉孫兵衛
19	土佐名家画譜	721. 2-13		嵩山堂
20	富嶽真景	721. 9-26	明治27年	小林新兵衛
21	波紋集(下)	727. 9-5ア③	明治34年	山田芸艸堂
22	百千鳥	727. 9-35	大正4年	日本風俗図絵刊行会
23	魚つくし	727. 9-37		安藤広重画
24	美術海 15	727. 9-50②	明治35年	山田直三郎
25	陶器図鑑 1	751. 3-12ア	明治36年	山田芸艸堂
26	幽峯美術応用	757. 7-2	明治22年	田中治兵衛
27	能楽図絵 2、4	773-35②、④		
参考出品				
28	赤絵金彩割取人物草花図深鉢	個人蔵	明治初期	銘 九谷旭山(任田)
29	墨絵金銀彩富嶽図大鉢	〃	明治29年5月	銘 大日本加賀九谷枕山(荒木)
30	赤絵百老図花瓶	〃	明治初期	銘 九谷友山堂(笹田)
31	赤絵金彩竹林七賢人図小皿	〃	大正~昭和	銘 九谷暁舟(柄本)
32	赤絵金銀彩蕪花鳥図輪花皿	〃	明治中期	銘 九谷逸山(八田)
33	赤絵金彩割取人物草花図水指	〃		銘 大日本九谷雪嶽堂製
34	色絵金彩大野湊神社御定紋徳利	〃		銘 九谷光仙(利岡)
35	金巻亀甲藤花文筒形花生	〃	明治後期	銘 九谷雪花(相川)
36	金欄手割取人物山水図手桶型花生	〃		銘 加賀九谷鎔木製之
37	赤絵金彩花鳥図小皿	〃		銘 九谷清閑(清水)
38	盛金青粒割取花鳥人物図小瓶	〃		銘 九谷美山(清水)
39	盛金青粒草花図盃5客	〃		銘 九谷美山(清水)
40	色絵金彩花詰徳利一対	〃		銘 九谷栄山(荒木)
41	色絵金彩花詰盃	〃		銘 九谷栄山(荒木)
42	色絵金彩花詰盃	〃		銘 九谷栄山(荒木)八十翁
43	色絵金彩花詰盃	〃		銘 九谷紫紅(若村)
44	盛金青粒葡萄図酒器	〃		銘 有聲
45	仁清錦万歳架置物	〃		箱書 昌華造
46	色絵金彩孔雀牡丹図花瓶	〃		銘 九谷鎔木製
47	色絵金彩群鶴波濤図花瓶	〃		銘 九谷造 谷口
48	色絵金彩波に兔図小皿	〃		銘 大日本九谷製
49	盛金絵付七福神図輪茶碗	〃		銘 九谷 細字 清山(小田)
50	色絵猩々図盃	〃		銘 九谷清閑(清水)
51	色絵金彩能楽玉井図徳利	〃		銘 九谷
52	盛金絵付龍虎図蓋付湯呑	〃		銘 九谷智梅(北)
53	盛金絵付三十六歌仙図蓋付湯呑	〃		銘 九谷 細字 金星(田村)
54	盛金絵付百人一首図蓋付湯呑	〃		銘 九谷鎔木 細字 清山(小田)
55	盛金絵付百人一首図蓋付湯呑	〃		銘 九谷錦山 細字 金星(田村)
56	盛金絵付百人一首図盃	〃		銘 無
57	色絵金彩夜討曾我図徳利一対	〃		銘 九谷
58	色絵金彩花鳥図ソーサー	〃		銘 藤岡岩花堂
59	盛金絵付青粒割取花鳥人物図小皿	〃		銘 藤岡岩花堂
60	盛金絵付菊花図ソーサー	〃		銘 藤岡岩花堂

※ 番号の網掛けは九谷文庫を示す。

表紙の写真：「赤絵金彩花鳥図小皿」(銘 九谷清閑)

『景年花鳥画譜』(721.08-29 ①)